地域社会変動と教育実践

—鈴木正氣の「地域に根ざす教育実践」の分析を手がかりに—

木戸口正宏

1、本論の課題意識
2、鈴木正氣の「地域に根ざす教育実践」の概要と問題設定
3、鈴木の「地域に根ざす教育実践」はどのような地域現実に「根ざして」いたのか
4、鈴木の「地域に根ざす教育実践」は、地域と子どもたちの現実に如何に向き合ったのか
5、鈴木の80年代実践を分析する
終わりに

1、本論の課題意識

1990年代以降の、日本産業の急激な構造転換による「日本的雇用」再編の一段の加速化は、一方で狭まった「日本型雇用」に向けて子ども・青年を学力競争・進学競争へと追い込む圧力として現れているが、他方、その競争を相対化し、自らが生まれ育った地域で働き・生活する青年の動きをもより鮮明に浮かび上がらせている[1]。その中で、学校は子どもや青年を引き続き学力競争・進学競争の圧力の下に置くのか、それとも、競争を相対化し「地域で生きる」子ども・青年の進路選択・職業選択を支え励ましていくような教育実践を構想し、それに取り組んでいくのかが厳しく問われている。教育研究もまた、そのような「地域に生きる」子ども・青年の動きを見据え、「地域と教育」との関係を巡る新たな理論を構築するという課題に直面しているのである。

本論は、そのような理論構築の手がかりとして、1960年代から1970年代にかけて取り組まれた「地域に根ざす教育実践」の中でも代表的な実践の一つとされている、鈴木正氣氏の一連の教育実践を取り上げ、教育実践がその「根ざす」地域の様々な状況に支えられ、あるいは制約されながら展開していく姿を描き出すことを通して、現在の地域社会と教育実践との関係を捉え直すための手がかりを提供しようとするものである。

2、鈴木正氣の「地域に根ざす教育実践」の概要と問題設定

本論では、鈴木正氣が1973年から77年の間に茨城県日立市立久慈小学校において行ってきた一連の実践を鈴木の「地域に根ざす教育実践」として扱っている。実践の詳細については、鈴木自身による著作『川口港から外港へ』[2]に依拠した。最初に、代表的な実践の一つと言える「久慈の漁業」について、その概要を紹介する。

1）74年度「久慈の漁業」の実践（5年生）

「久慈の漁業」は、子どもたちが、久慈の漁港・生鮮魚小売店見学の後、「久慈のさかな」「日立の工業と久慈の漁業」など、調べたいテーマにそって調査グループを組み、漁業関係者や父母・祖父母への聞き取り、図書館での資料調査などを行ない、それぞれのグループが調べあげた結果を授業で出し合いながら、「久慈の漁業は進歩しているか」「漁業が進歩しているのに、漁業人口が減っているのは何故か」というテーマに基づいて討論を行なう、という形で進められる。討論はやがて、それぞれの調査グループの発表や父母をも巻き込んだ討論を通して、「工業を発展させている商港（※日立港。詳細は後述）が、実は漁業を衰退させているのではないか」という仮説へとたどり着いていく。そして、そのような認識の深まりは、父親が漁業をやめて鉄工所へと転業した子どもが、漁業の将来について「町民会議でも開いて考えていくべきではないか」という意見を述べたり、またある子どもは、工業が漁業を「潰し」ながら発展していること

に疑問を抱きながらも、「商港はみんなに悪くいわれるかも知れませんがみんなの役に立っている、商港がなかったら・・・私たちがだめになってしまう」と日立港の持つ働きにこだわった意見を投げかけていくなど、子どもたちが背後に持っている生育歴や生活体験と結びつきながら、それぞれの子どもに再び受け止められ、レポートとしてまとめられていく(3)。

2）本論の問題設定

鈴木正氣のこのような一連の教育実践は、当時から「地域に根ざす教育実践」の典型的な事例として高い評価を受けてきたのであるが、基本的にこれらの評価の根底には、地域の伝統的産業を守る中で形成されてきた地域の感情・意識・ものの見方などが持つ「教育力」や、あるいは高度経済成長破綻以降、地域社会に生まれてきた「成長」に代わる価値観の模索が鈴木の実践を支えたという実践把握があった(4)。これらの把握は実践を背後から支えた力の一面を捉えてはいるが、同時に、これらの「力」が、地域の具体的などのような状況の下で形成され、また維持されてきたのかということについての考察はほとんどなかった。そのために、先行する鈴木実践評価は、実践が持つ制約や限界も含めた鈴木の実践の全体像を十分に捉え切れていなかった。それだけでなく、そのような研究上の制約は、鈴木の実践が有していた「リアリティ」(子どもや実践に参加した父母や地域住民にとっての）をより深くつかむことをも妨げていたといえる。鈴木の「地域に根ざす教育実践」が有していた可能性や子どもたちにとっての意味について、より深く明らかにすることが本論の第一の課題である。

また、80年を前後して、鈴木は再び実践を「転換」させていく。後述するように、この「転換」は実践者である鈴木によって意識的・自覚的に行われた「転換」なのであるが、このことによって鈴木の実践は、むしろ「地域」から離れ、「地域に根ざす教育実践」としてのリアリティを後退させていく。「地域に根ざした教育実践」の典型とされた鈴木の実践が、このような形で「転換」をするに至ったその過程を、実践に即して内在的に－その「転換」の「必然性」も含めて－検討することが、本論の第二の課題である。

本論は従って、①当時の久慈地域および日立市の状況を描き出し、それらの状況と鈴木の実践とを対峙させ、実践の「成功」を支えあるいは制約した地域の諸力を浮き彫りにし、②そのことによって、鈴木の「地域に根ざす教育実践」が有していたリアリティ－特に子どもたちにとっての－を逆照射し、③同時に実践が有していた「リアリティ」に内在する矛盾や葛藤は、80年代に鈴木の実践にどのような「転換」をもたらしたのかを明らかにすることを課題として書き進めていくことになる。

3、鈴木の「地域に根ざす教育実践」はどのような地域現実に「根ざして」いたのか

1）久慈町小史－実践の前史としての

最初に簡単に、鈴木の実践の舞台となった茨城県日立市久慈町の歴史を振り返っておきたい。漁業の町としての久慈の歴史は古く、明治40年前後の人口で比較すれば、その後日立市の中心地になる日立村（2415人）や高鈴村（後の助川町。3353人）を上回る4206人が、久慈町に住んでいる(5)。大正末期から昭和初期にかけて最盛期を迎えた漁業は、その後終戦を経て、他港との水揚げ競争や沿岸資源の枯渇の中で幾分かげりを見せたが、久慈町の住民は、太平洋に直面する海岸に新しい漁港（久慈漁港）を建設することで、久慈町の漁業が抱える困難を打開し、さらなる漁業の発展の展望を見いだそうとした。

久慈漁港の建設は1946年（昭和21年）に始まり、54年に一定の完成をみるが、その翌年に久慈町は日立市に合併され、57年には日立製作所の拠点港としての「久慈商港」（後の日立港）の建設が開始される。鈴木の77年の実践「川口港から外港へ」は、この新漁港建設をめぐる、久慈の漁民の「願い」と日立製作所の地域開発との矛盾が大きなモチーフになっているが、この55年の日立市への合併以降、久慈町と漁業の変遷は、日立製作所の地域開発と背後からそれを支える日立市の政策

というもう一つの力の影響を大きく受けていくことになる。

2）日立市合併以降の久慈地域の社会変動

その後の、鈴木が実践を展開するまでの時代（60年代～70年代初頭）に、久慈地域では以下の過程が進行した。

第一に、地域開発の急激な進行は、日立港の拡大による漁場の喪失、操業の制限、水質汚染等による漁業や地域の水産加工業・鮮魚商の衰退という直接的な影響だけでなく、日立製作所の「持ち家政策」に伴う住宅団地の建設と新規住民の急激な流入、漁業・農業の衰退に伴う漁業・農業人口の第二次産業への移動等の影響をもたらした。その過程は、久慈地域における就業構造の急激な転換をもたらし、久慈という地域の動向や住民の意識動向が、より深く日立製作所の動向や背後にある第二次産業の動向に規定されていく基盤を形成していくことになる。

第二に開発の進行はしかし、同時に漁民を中心とした地域住民の反発や抵抗を生み出し、地域住民の意識や行動様式を深いところで規定している漁業が地域開発に対する抵抗・対抗の軸として意識されていく過程を生み出していく。産業としての漁業が「衰退」していったことは事実であるが、その一方で60年代以降の地域開発に対する抵抗と受容の過程を経て、久慈地域住民の中には、地域開発の進行と漁業・水産加工業の全体的な衰退という状況の下で、それと引き換えに得た「漁業補償」や開発区域をもとに、自分たちの住む地域をどのように発展させていくのかという「地域づくり」への課題意識もまた生まれていったのである(6)。

加えて第三に、久慈地域における産業構造の変動は必ずしも地域共同体を全面的に解体する形では進行しなかったことを指摘する必要がある。

端的に言えばそれは、久慈地域における産業構造転換の独自な現れ（第１次産業、特に漁業従事者の第２次産業への転業の多くが下請けの中小・零細企業の経営者・従業員および大企業の現業［生産工程］労働者への転業として現れるという独特の階層的な労働力再生産の形態）が、結果として地域共同体の保持的な「再編成」をもたらした、ということである。

このような産業構造の変化の久慈地域独特の現れ方それ自体は、「県外からの転入者が、主として市内主要企業の事務あるいは管理部門に就業し、また地元出身者の多くが本工ないしは常用労働者として、工場の生産部門に従事する」(7)という日立市内における階層的な就業人口構成に強く規定されたものではあったが、他方で産業構造転換のこのような現れは、漁業を基盤にした地域共同体を完全に解体するのではなく、第一次産業従事者の急激な減少にも関わらず、漁業を題材に地域の歴史を描き直そうとした鈴木の実践に対して多くの父母・住民が参加することを支えた「地域性」を同時に生み出していったのである。

また、第四に日立市全域で見ても、日立製作所による地域開発の進行と、行政支配の深化に対する批判が、住民運動の広がりや政治的な意識の変化という形で現れている。全国的な動向に呼応するように、60年代末から70年代にかけて福祉運動や公害反対運動、環境保護運動など様々な住民運動が日立市においても発展を遂げているし、教育運動の分野でも「母親サークル」「地域学級ＰＴＡ」「ＰＴＡ民主化運動」「学童保育」「児童文学の会」などの取り組みが生まれ、様々な干渉や圧力を受けながらも、70年代に入り急速に発展していく(8)。また市長選挙で、日立製作所が推す市長候補の対立候補の得票数が倍増する等(9)、政治的な力関係にも変化が現れている。

つまり、これらの力が、全体として地域共同体の解体という過程を伴いながらも、一方で鈴木の実践に対する父母や地域住民の直接的な参加や協力という形で、他方で住民運動・教育運動という「『成長』にかわる新しい価値観の模索」の現れという間接的な形で複雑に関わり合い、鈴木の「地域に根ざす教育実践」を支えたと言えるだろう。

問題は、このような地域の状況が、実践にどのように位置づけられ、あるいは実践に関わった子どもたちにどのように受け止められていたのか、そしてそのことが実践にどのようなリアリティを付与したのかということである。以下、鈴木の実践に即して見てみたい。

4、鈴木の「地域に根ざす教育実践」は、地域と子どもたちの現実に如何に向き合ったのか

1）実践構造の分析ー実践における「漁業」の位置づけをめぐって

まず第一に、前節で指摘したような地域社会の変動の中で〈久慈の漁業〉が、地域共同体成立の経済的・文化的基盤としてだけではなく、地域住民の開発への抵抗と受容という葛藤をもっとも端的に示す存在としてーそれ故久慈地域の変貌を捉えていく視点として極めて歴史的なリアリティを持つ存在としてー浮かび上がってきたことを指摘しなければならない。

鈴木が77年に取り組んだ「川口港から外港へ」の実践で、子どもたちは、授業を終えての感想で、工業の発展と漁業の衰退という事実認識の指摘にとどまらず、工業開発の見直しを訴えたり、久慈川旧河口の埋立で残された土地に「漁業博物館」を建てて欲しいと述べるまでに至っている(10)。このようなある種の実践的な判断にまで踏み込んだ形で子どもたちが授業を受け止めていることの背景には、恐らくは地域住民の漁業に託した願いが持つ歴史的なリアリティと現在でもなお残っている「住民自身の手になる地域発展」(鈴木正氣)への志向を、実践での調査作業や当時の関係者の聞き取り調査を通して実感し、そのことを手がかりにしながら自らの地域認識を形成していったことがあるように思われる。そしてそのような存在であった漁業を軸に鈴木が実践を構想したことは、実践の過程で、地域の人たちへの聞き取り調査などを通して子どもたちが獲得した地域認識をよりリアルなものにすることになったと思われる。

2）子どもたちに鈴木の実践はどのように受けとめられたのか

また、久慈の漁業がこのようなものとして実践の中に位置づけられていたことは、鈴木の一連の実践が、その時点でこの地域に生きている子どもたちにとっては同時に自らの生活とその中に存在している様々な矛盾や葛藤をも気づかせるものとして意識されたであろうことを指摘しなければならない。そして、このことは鈴木の実践の評価を考えていく上で極めて重要な点であると思われる。

先に指摘したように、日立市における産業構造の転換に伴う産業別人口構成の変動と日立製作所の福利厚生政策の転換に伴う市内の急激な人口移動は、久慈地域においては、基本的には漁業・農業従事者の生産工程労働者および中小零細工場への転業、および住宅団地の造成などによる新規住民の急速な流入という形で現象した。このことは、当の子どもたちにとってはどのように意識されていただろうか。

「日立市内の方だと小学生でも8割から9割くらいは父親が日立関係の会社に勤めている人であるように思いますけれど、久慈浜の人たちは逆に、日立関係の会社に勤めているっていうよりも、うちのおじいさんの様に前は(漁船に)乗っていたけれど、今は自分で商売をしていますとか、漁業をやっていますとか、そういった感じの子どもがやはり多かったような気がします」(11)

このような感覚は、実践の中で親や地域住民に対する聞き取り調査に取り組んだ子どもたちの発言からも伺える(12)。実践の中でクラスの子ども集団が比較的まとまりをもって行動し得たことや、また先に述べたように漁業を軸にした実践に対して父母や地域住民が、直接の漁業関係者ではなくても、授業づくりに参加し、また自分の子ども時代の経験などを思い出しながら実践に関わっていくことが出来たことの背景には、一つにはここで子どもたちが意識しているような、「地域性」の存在がーそしてその「地域性」の根底となっている漁業を実践の軸に位置づけたことがー重要な役割を果たしていたと思われる。

と同時に、子どもたちの地域認識ーそれはまず何より地域で子どもたちが接する「大人たち」の姿として現れているーは、これまで述べてきた「地元の人たち」への親近感という形で示されている、久慈地域独自の「地域性」ーその根底には先に述べた地域社会変動の独自の現れが存在していたーへの共感として意識されるとともに、一方で「最近住み始めた」人たちとの関わりで、自分たちとの違いを強く意識し、そのことが自分のおかれている立場や生活、さらには親の職業に対する

否定的な見方や葛藤として意識されていたことが指摘されなければならない。鈴木の実践の中での子どもたちの葛藤を含んだ発言や、成人した当時の生徒への聞き取りの中に、実践に対する極めて「否定的な」評価が見られること等に、そのことは端的に示されている。

例えば先に引用した74年度の実践「久慈の漁業」では、ある子どもは、日立港の建設にともない漁業が衰退し地域の水産加工業もまた衰退していくことに疑問を覚えながらも、最終的には「でも商港はみんな（漁業）からみれば悪くいわれるかもしれませんが、みんなの役にたっている。商港がなかったら私たちがだめになっていく」と、日立港と自分たちの生活との関わりへのこだわりを述べている(13)。

また、「久慈の漁業」の生徒たちへの聞き取りを試みた村井淳志は、父親が漁業に携わっていた元生徒から次のような聞き取りをしている。

「（鈴木）先生は久慈の小学校なので漁業に関係した家庭がいると思ってあのテーマをやったのでしょうが、私は漁業がいやでサラリーマンの家が羨ましかったんです。サンマをやっていたので夏休みはなかったようなものですし、旅行も外食もなくて。手伝いをしないと怒られたということもありました。だから家業が嫌いだから話したくなかったですし、私の親も、あまり学校のことには関心はありませんでした。あんまり漁業のことに触れないでという気持ちが強かったんです。第一次産業で恥ずかしいというような感じもありましたから」(14)

このような葛藤を含んだ実践の受け止めとその後の人生経験を経ての評価が示しているのは、鈴木の実践を支えた地域の力が、極めて複雑な葛藤や対立する力の拮抗を含んで成立していたということである。特に、このような地域共同体の「再編成」は、同時に産業構造の転換に伴う生活様式の急激な変化や新規住民の流入による生活様式の多様化を伴いながらの再編成であり、そのことは子どもたちの意識に、単純には地域共同体とそれを支える価値・生活展望に共感できないような非常に複雑な感情を生み出していたと思われるのである。そして実践を支えた久慈の「地域性」とその土台の「解体」という、その後に進行した過程－そしてそれは鈴木の実践に関わった子どもたちによってその後生きられた現実であるが－を経て、子どもたちが「久慈の漁業」を軸に展開された鈴木の実践を振り返ったとき、実践に対する評価もまた様々な葛藤を含んだものとして意識されることになったと思われるのである。

同時に指摘しなければならないことは、このような葛藤を含んだ実践の評価が、むしろ恐らくは当の鈴木の実践を通して形成され、あるいは掘り起こされたのだということである。〈久慈の漁業〉を軸にして展開された実践は、子どもたちの中に、自分たちやその親へとつながる漁業への共感とともに、一方でその漁業を衰退に追い込んでいる「日製」（日立製作所）をはじめとする第２次産業が自分たちの生活により深く関わっていることもまた、より深く認識させるものであった。そのことは、子どもたちが自身の生活を振り返ってみたときに、新たな「葛藤」として意識されていったのではないだろうか。そしてこのことは、鈴木の実践がそれ故に、生徒たちが持っていたそれぞれの生活基盤に深く突き刺さり、その問い直しを迫るような実践であったことをも逆説的にではあるが示している。そして鈴木の実践を経て、意識されあるいは自覚化された、子どもたちの中の葛藤する価値観は、恐らくはその後の地域社会の変動とも関わって、鈴木の教え子たち－久慈地域の青年たち－の進路選択やその後の生き方においても重要な位置を占めることになっただろうと思われる(15)。

ところで、ここで子どもたちの「葛藤」として示されている、鈴木の実践を支えた地域諸力の中の複雑な拮抗は、その後80年代において鈴木の実践が地域から離れ「地域に根ざす教育実践」としてのリアリティを後退させていく過程と深く関わっている。本論の問題意識に即すなら、その過程は、70年代に総体として鈴木の実践を支える力として現れてきた地域諸力が、その後の地域社会変動の下でどのように変化し、またそれらは子どもたちの上にどのように現れ、同時に鈴木の実践に

どのように受け止められ、鈴木自身に実践の「転換」の「必然性」を意識させたのか、という形で改めて問い直される必要がある。以下、鈴木が80年代に展開した実践に即して見ていくことにしたい。

5、鈴木の80年代実践を分析する

1）80年代実践の概要と鈴木の問題意識

鈴木が「80年代」に取り組んだ一連の実践は、鈴木自身の言葉を借りれば、「子どもの科学的社会認識の形成を、前著では必ずしも自覚的に捉えられていなかった『日常の世界と科学の世界』という構造概念と、『わたり』という方法概念を用い、今の子どもたちに決定的に欠落し、自立へのふみ台となる『支え合う分業』(能力主義によってバラバラに切り離された分業ではない）を、子どもの発達の段階に即して捉えさせよう」[16]との意図のもとに構想されたものであった[17]。

例えば、その代表的実践である「自動車工業」は（5年生　81年)、現代日本の主要な産業である自動車工業における生産過程をつかむ中で、大きな生産力を生み出す総合的な分業の姿をつかむとともに、自動車工業自身が様々な産業における分業に支えられることによって成り立っていること、またそこで働いている人もまた他の様々な産業・職業で生み出されるものを消費することによって生活していることを学び、社会的分業の様々な肢に携わる人たちが、実は互いに支え合う職業であるという点で本来平等であるのだということを子どもたちに見通させようとしたものであった。「自動車工業」を取りあげたこの実践は、一つは社会科において実践を構想することが難しいとされてきた工業学習に取り組んだ実践であること、もう一つは商品世界の中で生活体験から切り離されている日常生活での子どもの認識を「科学の世界」を通して切り開き、人と人とが支えあう関係へと子どもの認識を発展させていく実践であったことなどから多くの教師・研究者の評価と注目を集めた（鈴木が実践を報告した教育科学研究会「社会認識と教育」部会では、その後様々な教師が工夫や改良を重ねながら「自動車工業」の実践に取り組んだことが報告されている)。

では鈴木が自らの実践をこのような形で「転換」させようとした意図はどこにあったのだろうか。この点について、鈴木は次のように述べている。

「その時には『人間と人間との関係はどうあるべきか』ということを考えていたんです。70年代の実践が『ものと人』との関係を中心にしていたんですが、やはり社会科という教科の課題は人と人との関係を扱うことだろうと、少なくともぼくはそう考えていましたから・・・」[18]

このような実践を鈴木が構想した背景には、鈴木の目の前の子どもたちが80年代に入って急激に変貌したという意識があった。即ち、それは、地域社会の急激な変貌が「成長・発達の過程にある弱い存在」である子どもたちに「『忘れもの』『落としもの』の続出、授業中の『おしゃべり』、『日常の言葉遣いの荒さ』など、生活を見通す能力、ものを管理する能力、自他の関係把握能力を衰退させ日常的なだらしなさを生んでいく」[19]ような、また、いじめや学級における子ども集団の形成の困難に示されるような、子どもの他者と「支えあう」ような関係を取り結ぶ能力の衰退という形で鈴木に受け止められるような「歪み」であった。このことと関わって学級集団づくりや日常的な生活習慣・生活リズムの確立などを軸にした生活指導と教科指導とが緊密な関係を持つものとして捉えられていたことも鈴木の80年代の実践の特徴であった。

この点からいえば鈴木の実践の「転換」は、子どもの認識や日常的な生活習慣などの背景にある「子どもの生活」を意識的に実践の中に位置づけたという意味あいを持つものであると捉えることも可能である。実際に岸本実は、鈴木の80年代実践への「転換」をそのような視点から分析している[20]。しかし、これまで本論で述べてきた視角から振り返れば、鈴木の実践のこの「転換」は極めて大きな質的な転換を伴うものであった。

最大の違いは、「地域」の捉え方の違いである。一言でいえば、「地域」を本質的に「教育力」を持ったものとして捉えているか、即ち子どもたちが調査やものとの対面を通して認識を発展させることの出来る場として「地域」

を捉えているかいないかという点で決定的ともいえる違いがあるのである。

鈴木が78年に世に問うた『川口港から外港へ』はその第一章「社会科の教材づくり」で「しかし、一方では衰えたとはいえ、伝統的産業である漁業は、漁民の手によって守られているし、それによって形成されてきた地域の感情や意識、ものの見方や考え方、さらには行動様式は、祖父母、父母を通して子どもの上に広範に投影されているのを私たちは知っているし、その良質な部分を見抜こうともしている」と述べ、意識するとしないとに関わらず「漁業関係者や親自身が実質的に教える側にた」っていると「地域の教育力」の存在を指摘している。またそのような中で「同時にまた、いわゆる『高度経済成長』の破綻と、それが志向する『生活向上』という価値観に対する内省によって起こる『成長』にかわる新しい価値観の模索は、すでにこの地域の捉え直しとも関わって身近なところから始まっている」と開発によって変貌を遂げたこの地域の中に生まれつつある新しい価値観－例えばこの章で扱われている社会科教材「瀬上川と久慈の下水」での住民意識調査に見られるような、自分たちの生活排水が地域の川を汚していることに対する反省と下水道整備を求める住民要求の芽生えのような－の可能性について述べている[21]。

これに対して80年代の実践では、このような地域認識は影をひそめ、むしろ高度経済成長の中での地域社会の急激な変化が先に述べたような様々な否定的影響を子どもたちに与えていることが指摘されるようになる。そして実践の構想においても、「地域」は根ざすべき所ではなく、むしろ学校や学級はそこから総体的に独立した場として形成されるべきであるとされるのである。

鈴木は『学校探検から自動車工業まで』の最終章において地域と学級との関係について論じ、そこで子どもが「日常の世界」と「科学の世界」そして両者を統合していく中でその両方の世界を描き換えていく世界の三者の世界の関係を作り上げていくことの重要性について述べ、このような三つの世界の関係を築き上げていく場としての地域と学級（学校）との相似性を指摘している。しかし「学級（学校）」はそこで展開される日常的行為や社会的生産労働（疑似的生産労働）が、地域における日常生活や社会的行為や社会的生産労働と違った質を持っていることから、「地域社会から相対的に独立する、ある意味では疑似的地域」として捉えられることが同時に指摘される。そして学級と地域の双方で「異質なものの相互の依存性を確実に断ち切る資本（生産性）の論理が貫徹し、学級（学校）もまた能力主義によって人間を価値づけ序列化することによって人間を商品化しようとしている」状況の下で、「地域における三者の関係が創り上げら」れていない中でも、まず学級の中でこのような関係の形成が追求されなければならないとされ、このような追求は「地域が高度に発達した工業化社会にあって、人間を取り戻す来るべき新しい共同体を模索する過程と同等な質を持つものである」[22]と指摘されている。

この論述からは、鈴木が子どもたちの「日常の世界」を地域や家庭での生活を基盤にした「日常の世界」と学級・学校生活を土台とした「日常の世界」とに峻別し、当面学級における「日常生活の描き換え」を通して学級や学校の中に「支えあう関係」を築いていくという形で－ある意味では家庭や地域から子どもを守る様な形で－実践を構想せざるを得なかったということが浮かび上がってくる。

鈴木がこのように述べていることの背後には、80年代を前後する日立および久慈地域の急激な社会変動の存在があったことは確かだろう。その過程は、大きく言えば、「高度経済成長」破綻以降の「低成長期」における企業の減量経営への着手、労働者支配・地域支配の再編成による、地域住民および子どもたちの将来展望の動揺と不安の拡大、およびそのことがもたらした久慈地域や日立市における新たな進学率の上昇と進学要求の顕在化・教育競争の激化、久慈地域における漁業のさらなる衰退－実践を直接に支える力の衰退－、一方での企業の労働政策・地域戦略の転換および日立市の行政政策の転換による、労働者運動の急激な衰退および政治的な革新意識の全般的な保守化、60年代末から70年代にかけ

て日立市内で広がった住民運動の急速な衰退と「体制内化」－鈴木の「地域に根ざす教育実践」を背後から支えていた「『成長』に変わる新しい価値観の模索」の喪失－という過程であった（特にこの変化の中では、地域住民の生活展望の不安定化と日立地域における進学率の急上昇による進学要求の顕在化が重要な意味を持っていたであろうことを指摘したい。このことは、これまで鈴木の実践に参加しこれを支えていた地域住民が、実践に参加する条件を失っていく過程であると同時に、学校に積極的に関わろうとする住民の要求の内実が、より強く上級の学校への進学を意識せざるを得ないような形で変化していく過程でもあるからである）[23]。

恐らくその過程は、鈴木にとっては、80年代に入って急速に教育運動や住民運動などの「成長」にかわる「新しい価値観の模索」の動きが地域の中で見えなくなっていった過程であり、またかつて自分の実践を直接支えてくれた地域住民の姿が見えなくなっていく過程でもあったろう。鈴木が教科実践と学級・学校づくりを通して学級・学校の中に「支えあう人間関係」を創りあげていくことを「来るべき新しい共同体」を模索する過程と「同等な質」を持つものとして措定していったことは、そのような模索の動きが急速に衰退していくような地域の状況の中で－即ち鈴木の実践を背後から支えるような力が見えなくなっていく状況の中で－相対的に区別された学級の中での教育実践において、かろうじてそのような「模索」を続けていこうとする形で鈴木の「転換」が行われたことを示している。

2）80年代実践への「転換」はどのような意味を持っていたのか。

ではこのような視点から鈴木の実践の「転換」を捉え直したときに、鈴木の80年代の実践はどのように捉え直されるのであろうか。

鈴木の実践構想の前提となる地域像が70年代の実践と80年代の実践とでは非常に異なっていることは先に指摘した通りであるが、そのことは実践の中で認識対象として捉えられている「地域」の姿にも反映されている。

例えば、4年生の実践「いろいろな土地の暮らし」では、日本国内の特色ある各地域について、人間の労働の生産物としての農作物を軸にして「場所・もの・人」の関係に基づいて対象化し、それらの地域の特性と「それが成立するための前提となる社会的分業を柱に」教材が構成されている。この教材を通して子どもたちに、例えば農家においては①自分の家で食べる以上の農作物を作っていること、②農作物を作るのに、自分の家では作れない農機具を必要としていること、③必要以上の農作物は農機具に変えられることを迫わせ、そのことによって「農作物を生産する農民と、農機具を生産する工場労働者が『労働生産物』という点で両者に共通するものを交換しあって結びつく人間の関係、つまりどのような職業であろうと、対等平等な関係で支えあわねばならない人間同士の関係」を明らかにしたいというのが鈴木の実践構想であった[24]。

この「いろいろな土地のくらし」の実践は、70年代の実践と同じく第一次産業である農業が取りあげられている。それは、直接的には農作物が「子どもたちが生きていくのに欠くことができない食生活の主流であ」り、また「その生産のための具体的労働が・・・比較的捉えやすい」ことなどから「子どもの日常の世界に近い」ことによっている。このような第一次産業に対する捉え方は、70年代の実践にも見られたものではあるが、一方で70年代とは全く異なっているのは、漁業が久慈地域を特徴づける産業として直接・間接に子どもたちの生活や行動・ものの考え方に影響を及ぼしているということが、漁業を実践の対象とした大きな理由であったのに対して、80年代の実践で農業を取りあげる際にはそのような地域との関わりという視角は見ることはできないということである（当時久慈地域には農業従事者が存在しなかったという状況もあったが）。そのことは、鈴木自身が当時の生徒たちと行なった座談会「久慈の漁業その後」で70年代実践を振り返って「もし久慈が農業地域だったら、先生は漁業をやらないで農業問題をやったろうね」[25]と述べたことと非常に対照的である。それは単に地域との結びつきの有無という問題ではなく、そのことによって実践の中に現れてくる第一次産業の像が大

きく異なってくるという問題につながっていく。70年代の実践において漁業は、日立製作所が、その事業展開の中で漁業の存立基盤を奪っていくという状況との緊張の中で、非常に歴史的な存在として、それ故地域の変貌を歴史的に把握する軸として実践の中に立ち現れていたのに対して、この「いろいろな土地のくらし」の中の農業は、地域の工業化との緊張関係や、「第一次産業を切り捨てながら第二次・第三次産業を発展させている」[26]日本の産業の特質からも切り離された存在として実践に登場しているのである。

そのことは5年生の実践「自動車工業」においてより顕著に現れている。「自動車工業」では、子どもたちが追っていく「ものとの」「ものと人」「人と人」との関係の深まりは次のように構想されている。「①自動車とその部品－自動車は部品の組み合わせである。②自動車工場のしくみ－大量生産は分業によっている。③自動車をつくる人－自動車をつくる人は家族も養っている。④支えあう分業－人間は支えあう分業によって生きている」[27]。

このことを通して「その延長上に家庭の生活に必要なものは分業によって生産されていること」、工場レベルでの分業でも、社会的な意味での分業でも、その分業は互いに支えあっており、そのことをつかむことを通して「民主主義の意味」を深めさせようというのがこの実践の構想であるとされた。この実践の過程では、分業による大量生産が何故可能なのかということで「フォードシステム」（ベルトコンベアーシステム）の原理について学習したり、また日立製作所の下請けで自動車のレギュレーターを製造している工場に見学にいき、そこで働いている人たちが給料をもらい、その給料によって生活に必要なものを購入したり、家族を養っていたりするということ、さらにその先にはそれぞれの商品を生産している人たちがいて、その人たちもまた家族を養っていること、そしてそのような人たちが生活していくためには互いの仕事を必要としていることがつかまれ、その中心的な概念が「分業」であり、仕事と仕事をつなぐものが「お金」であることが子どもたちに確認されていく[28]。

このような構想は、自動車工業の分業が非常に多岐に渡り、また生産労働と管理労働のような非常に複雑な分業の仕方をしているために、自動車を生産するという過程そのものをトータルにつかむことが非常に困難であるということ、また生産にかかわる人と人との関係でも資本と賃金という概念把握に向かうことは困難であることなどを踏まえた上でなされたものであり、小学生5年生の工業学習として考えた場合は、恐らくかなり練られたものであるといえるのかもしれない。しかし、この時期の、子どもたちの課題に応える実践としてはどうであったろうか。地域の中で子どもたちと親を取りまく生活が激しく変貌し、その中で現在の生活や将来展望に対する動揺があった時期にも関わらず－そしてそのことは恐らく見学先であった下請け企業にも現れていただろう－実践の中の自動車工業は非常に静的な、地域の歴史的状況と独立した存在として実践の中に現れている。言葉を替えれば「地域」の中の自動車工業を扱っているにも関わらず、その「自動車工業」を通して「地域」が直面している状況や、あるいは端的に「自動車工業」に携わっている人たちの置かれている状況は、見えてこないのである。

そのような実践構造の転換が子どもの社会認識形成にとってどのような意味を持っているのかについて判断することは難しいが、少なくともここには、子どもたちが地域現実の変化を歴史的に捉えるとともに、その問題を自分自身の問題として捉え、また地域現実の歴史的な推移の中に、具体的に「地域をつくっていく」力が生まれてくることまでも把握し得るような、実践の構造は浮かび上がってこない。

恐らく、鈴木のこの「転換」は、70年代の実践において子どもたちの中である種の「葛藤」として意識されていたような状況が、80年代以降、より見えにくいものとして－「葛藤」という形では意識されにくいような、より内面化された形で－、発達の「歪み」という目に見えるものによってむしろ覆い隠される形で現れざるを得なかったことに対して、何とか実践を対峙させようとしたものであった。むしろ、そのような変化に対して極めて

敏感であったが故に、鈴木は自らの実践を積極的に「転換」させていったとも言えるのである。そのために鈴木は、実践と地域との距離を取り、子どもを学級の中で守ろうとしたのだろう。しかしそのことが、本来実践が視野に入れた筈の子どもたちの「生活」からも、実践を引き剥がしてしまった。「地域」を根ざし得るものとして想定し得ない状況の下では、鈴木が構想した「新しい共同体の模索」は、極めて外在的な形でしか構想され得なかった。そのことによって、鈴木の80年代の実践はこれまで述べてきた〈脆弱〉性を抱え込まざるをえなかったのではないだろうか[29]。

終わりに

地域社会の変貌と、子どもたちの「変化」という問題、その中での実践の「転換」という問題はおそらく80年代に入り多くの社会科教師が直面せざるを得なかった課題であった。その課題は恐らく現在でも問われている課題であるだろう。むしろ、90年代以降の産業構造転換の下での「企業社会」の再編は、地域に新たな困難と課題をもたらしている。

ただ、まったく手がかりがないわけではない。例えば、90年代の日立市および久慈地域に目を転じれば、鈴木の実践を支えた力と「転換」させた力との拮抗は新たな段階に直面している。いまのところそれは、長年この地域を支配してきた日立製作所の業績悪化とそれに伴う事業再編の中での日立市の「衰退」という形で浮かび上がってきているが、一方で、かつて鈴木の実践を支えた久慈という地域は、産業としての、また人々の行動様式や価値観を深く規定する〈文化〉としての漁業に支えられ、日立市や日立製作所の動向に深く規定されながらも、それらとの緊張した関係の中で現在もなお相対的に自立した地域コミュニティとして成立しているという事実がある[30]。近年の鈴木自身による「地域に根ざす教育実践」の捉え直しの中でも、「地域に戻ってきた」元生徒たちのことが描かれているが[31]、そこには90年代の現在における「地域に根ざす教育」のあり方を考えていくための一つの手がかりがあるように思われる。そのような「手がかり」を、教育実践とどのように結びつけるのかということを、今後の筆者の課題として確認することで本論を終えたい。

註

(1)文部省『学校基本調査報告書』「中卒者・高卒者の就職者数と県外就職率の推移」によれば、県外就職率は71・72年の33%をピークに、1990年には23%にまで減少している。このことは「地元」への就職率の上昇を間接的に示している。

(2)1978.8発行。なお同書は第1回教育科学研究会賞を受賞した。「地域に根ざす教育実践」として同書に収録された各年度の実践は以下の通り。73年「うおをとる」(2年生)、74年「久慈の漁業」(5年生)「久慈の下水」(3年生　※クラブ活動)、76年「いさばや」(3年生)、77年「川口港から外港へ」(4年生)。

(3)前掲書 pp.44 ～ 70。

(4)鈴木の実践に対する評価には大きく、子ども・青年の科学的認識の発達および教材編成論からの評価（河内徳子「社会科学の教育における授業の典型」『講座　日本の学力第7巻　自然・社会』1979、中西新太郎「社会科教育における『科学』の再把握－鈴木正氣氏の実践と構想における労働過程の位置づけをめぐって－」『一橋論叢』第87巻2号　1982.2、坂元忠芳「学習意欲論の試み－学習意欲の二重性をめぐって－」『国民教育』37号　1978.7、等）および、地域社会の現実に即した実践構想や父母・住民の教育参加に示される「地域に根ざした教育実践」としての評価（藤岡貞彦「コメント・地域に根ざす教育実践」『教育』1975.12、佐貫浩「親・住民の教育力と参加論の検討－『地域に根ざす教育』における教育行政への発想」『東京大学教育学部教育行政研究室紀要』第一号　1980　等）の二つの軸がある。本論では主に後者の議論を批判の対象としているが、前者の議論においても「地域に根ざす教育実践」としての鈴木実践把握は共有されており、同様の批判が成立すると思われる。

(5)以上の数字は帯刀治編『企業城下町日立の「リストラ」』1993.3　p.41所収の図表を参照した。また、当時の久慈の漁業の状況については川島優「久慈町漁業実態報告」日立市『日立の水産』第7号　1991.3　を参照した。

(6)その課題意識は77年に「地域住民のほぼ合意を得」て結成された「久慈地区再開発協議会」の取り組みへと結実していく。この会は現在でも活動を継続している。詳細は鈴木正氣「埋め立てられる旧河口港」『教育』1979.8　等を参照のこと。

(7)茨城県（国土庁委託）『日立市における工業都市機能－モデル的都市機能調査（工業都市）－』p.91。

(8)前掲『川口港から外港へ』「第八章　教育運動と教育実践」参照。

(9)小林三衛「日立市における選挙の企業的性格」『茨城大学地域総合研究所年報』第13号　1980を参照した。

(10)前掲『川口港から外港へ』pp.152～155。

(11)「川口港から外港へ」の元生徒の方へのインタビューより。インタビューは96年11月に日立市内で行なわせていただいた。なお、インタビューには鈴木正氣氏にも同席頂いた。

(12)「久慈の漁業」に参加した生徒達が、その2年後に当時の実践を振り返った座談会で、生徒の一人は次のように述べている。「・・・地元の人といっても、ぼくたちが『久慈の祭り』を調べたときわかったんですけど、県営アパートの人たちは、ここに住みついたのが最近なので、そういうことにあまり興味を持っていないから・・・何というか、昔からここに住んでいる人たちに漁業関係のことを聞いたときはやさしく教えてくれても、日立港の場合には、よそからきて働いているので、余分なことは教えてくれないという感じで。だから地元の人といっても、昔から住んでいる限られた人でないと・・・」（前掲『川口港から外港へ』p.179）。

(13)前掲書p.68。

(14)村井淳志『学力から意味へ』p.183

(15)当時の生徒の方の聞き取りについては、鈴木正氣氏のご協力の下に筆者が96年に行ったものを基本的に参照しているが、他に前掲村井淳志『学力から意味へ』所収の聞き取りも大変参考になった。

(16)鈴木正氣『学校探検から自動車工業まで－日常の世界から科学の世界へ』1983.8　p.3。

(17)鈴木の80年代実践については、前掲『学校探検から自動車工業まで』および『支えあう子どもたち』1986.7を参照した。実践は78年から81年に取り組まれたものであるが、鈴木自身の区分に従い80年代実践と呼ぶ。

(18)執筆者による鈴木氏本人へのインタビュー（96.11実施）より。

(19)前掲『支えあう子どもたち』pp.17～18。

(20)岸本実「社会科における概念と現実の探求過程の組織化－鈴木正氣社会科実践論の検討－」『滋賀大学教育学部紀要』。

(21)前掲『川口港から外港へ』p.33。

(22)前掲『学校探検から自動車工業まで』pp.262～264。

(23)久慈地域および日立市の80年代前後の状況については、次の文献を参照した。前掲『企業城下町日立の「リストラ」』、日立市『日立市の統計』1973年度版～1999年度版、日立市編『新編日立市史』、前掲『茨城大学地域総合研究所年報』、後藤道夫「日本型大衆社会とその形成－社会的統合と政治的統合の錯綜」渡辺治他編『日本近現代史　構造と変動』4　戦後改革と現代社会の形成　1994年等。

(24)「いろいろな土地のくらし」については前掲『学校探検から自動車工業まで』pp.126～151を参照のこと。

(25)前掲『川口港から外港へ』p.174。

(26)前掲書p.174。

(27)前掲『学校探検から自動車工業まで』pp.154～155。

(28)「自動車工業」の実践については前掲書pp.151～196を参照した。

(29)本論は、その課題設定との関わりで、鈴木の実践の80年代における「転換」を70年代の実践からのある種の「後退」として描いているが、ここには本来解明すべき課題に対する一定の留保が存在している。第一に、80年代の実践が70年代からの「後退」であるとすれば、80年代に実践の「転換」を余儀なくさせるような歴史的制約は実は70年代の実践構想にも内在していたのではないかという問題、第二にそれと裏表の関係であるが、80年代を前後する急激な地域社会と子どもたちの変化に対して向き合うような実践は、どのような形でなら可能であったのか、それは鈴木の70年代の実践が有していた可能性のどのような形での「転換」の下でなら行ない得たのか、という問題である。これら2点はいずれも鈴木の実践をより全面的に分析する上で不可欠の課題であるが、今回は充分に展開することができなかった。他稿を期したい。

(30)「まちと生きる　第2部　岐路に立つ　明日見えず漂う工場の街」（連載記事）『日本経済新聞』1998年8月17日付を参照した。なお、90年代の日立市および久慈地域の状況については、拙稿「一九九〇年代の久慈地域から－九〇年代の『地域に根ざす教育実践』の手がかりを求めて」教育実践検討会編『問い続けるわれら』1998.3　を参照のこと。

(31)鈴木正氣「『久慈の漁業』その後」『教育』No.6191997.11。